C 182　岐阜県瑞浪市における住民の薬草利用と健康づくりとのかかわり

中京短期大学　○ 梅村祥世 山内睦子 岡田悦政 安達和俊

目的　高齢化社会の到来は、更なる健康を求めて、自然食・野草・薬草など関心を高めている。岐阜県は安土桃山時代から伊吹山に薬草園を開いたといわれ、薬草が豊富で薬草利用も郷土に根付いているといわれているが、県内の大野保健所の調査を参考として、瑞浪市においてはどのような状況であるか、特に民間療法の薬草利用の状態を知り、また、健康食としての利用状況を知り、薬草と人々の健康とのかかわりについて調べることを目的とする。

方法　平成３年度岐阜県主催（９９市町村）の薬草ウオッチャーとして瑞浪地区を担当した。薬草ウオッチングしながら、地域住民の薬草に関して、６月～１２月の期間にアンケートを取り、薬草と健康づくりとのかかわりについて調べた。

結果　1.人口約４万人の瑞浪市は自然の薬草が２００種以上あり、薬草に恵まれていた。

2.大野保健所調査の住民と比べると薬草利用者は少ないが、家庭で健康や嗜好品として薬草の栽培をはじめたとする者があり、関心が高まる傾向がみられた。

3.健康のためビタミンやカロチンなどを新鮮な自然野菜や自然野草に求めている傾向がみられた。

4.有病者で医療を受けている者が、栄養学的な健康食に加えて家庭看護食・保育食に対して薬理作用を考え、食膳を工夫している者が見られた。

5.自然環境の破壊による水質汚染により、植物への影響を心配している者もみられた。また、野生のきのこによる一家食中毒で治療中であった例もみられた。